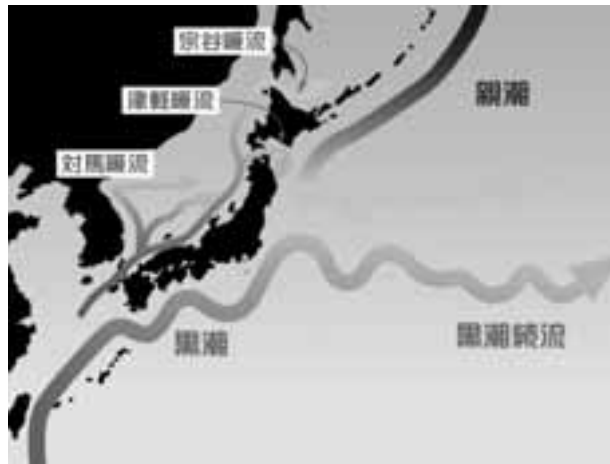


II章 写真・図版に見る漁業・漁法

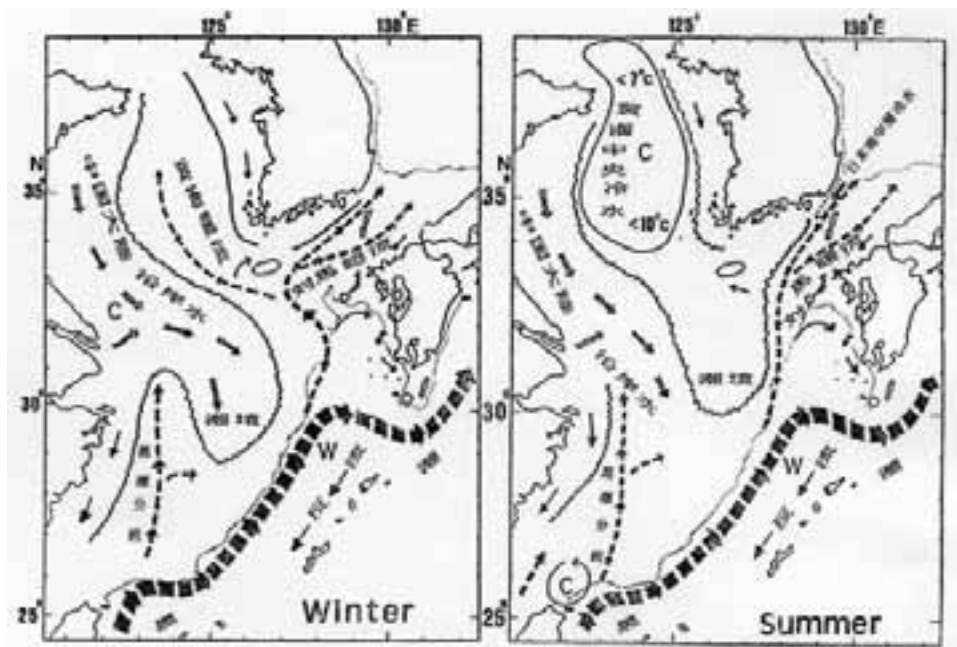
1、各地から
2、カツオ漁及びカツオ節製造
3、深海一本釣
4、底立延縄
5、曳き縄
6、マグロ延縄

1、各地から

1、国内有数の漁場、各地から出漁

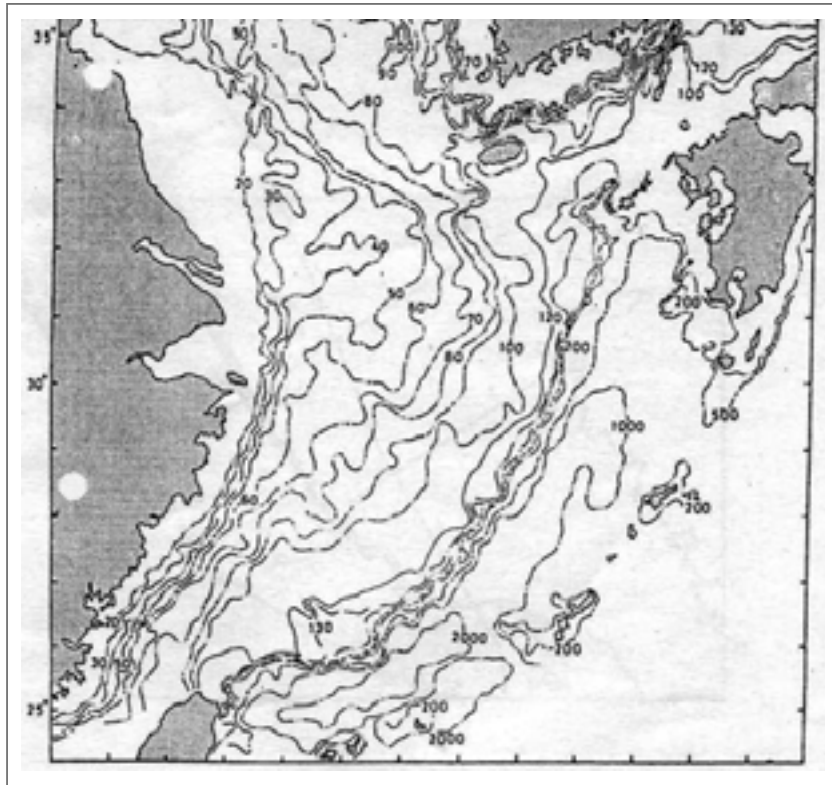


黒潮海流図、尖閣諸島は黒潮回廊に位置している。黒潮は大陸棚斜面に沿って北東に流れトカラ海峡から太平洋に出る。(ウェブサイト「海の教室」より)。

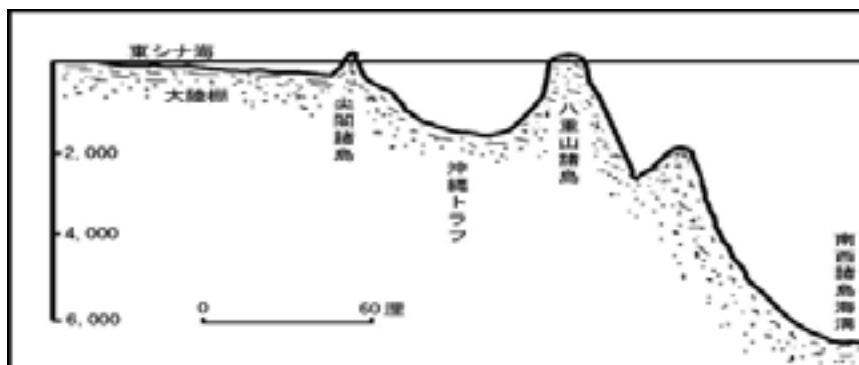


東シナ海の海流図、冬期(左)と夏期(右)の水塊分布模式図。(近藤正人 1985)

魚釣島近海で大陸棚を黒潮分脈が北流し、中国大陸沿岸水との間に潮境が形成される。そのため、尖閣諸島近海では南方系表層魚のカツオ、マグロ、底魚のハマダイ等の好漁場となり、大陸棚上では温帯性のアジ、サバ、キダイ、アマダイ等の豊かな漁場となっている。



東シナ海大陸棚の海底深度分布図。大陸棚は次第に深度を増し、尖閣諸島付近では120～200m深度となっている。(「尖閣諸島海域・漁場利用対策会議報告」より)



東シナ海大陸棚～尖閣諸島～八重山諸島の断面模式図。尖閣諸島は大陸棚の縁辺に突出し、北上する黒潮の潮目となり、豊かな漁場を形成している。

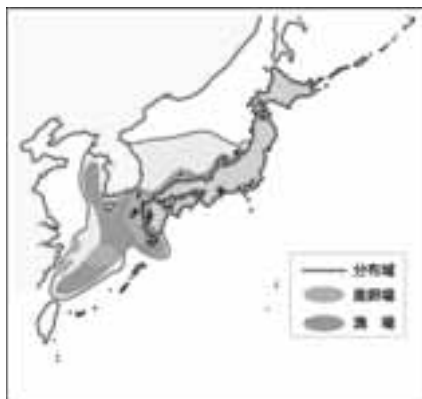
東シナ海大陸棚・温帯性魚も豊富



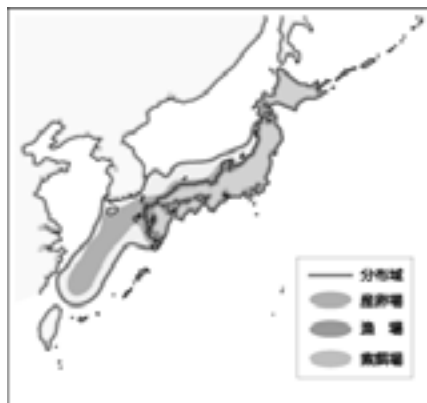
①アマダイ



②ゴマサバ



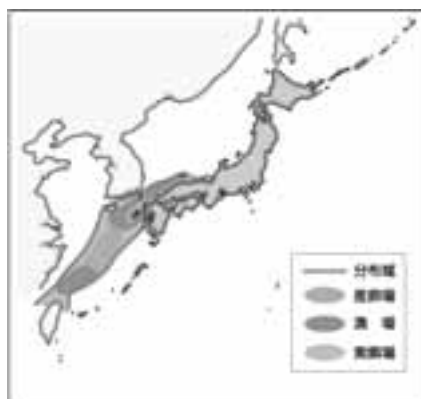
③マサバ



④マアジ



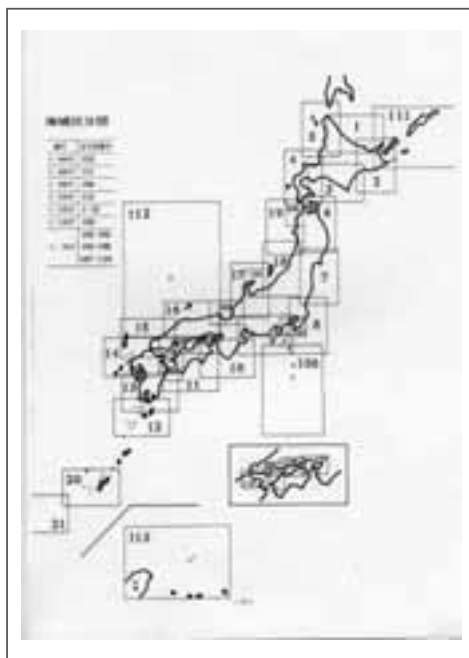
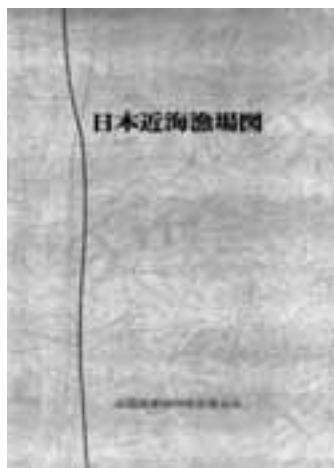
⑤マルアジ



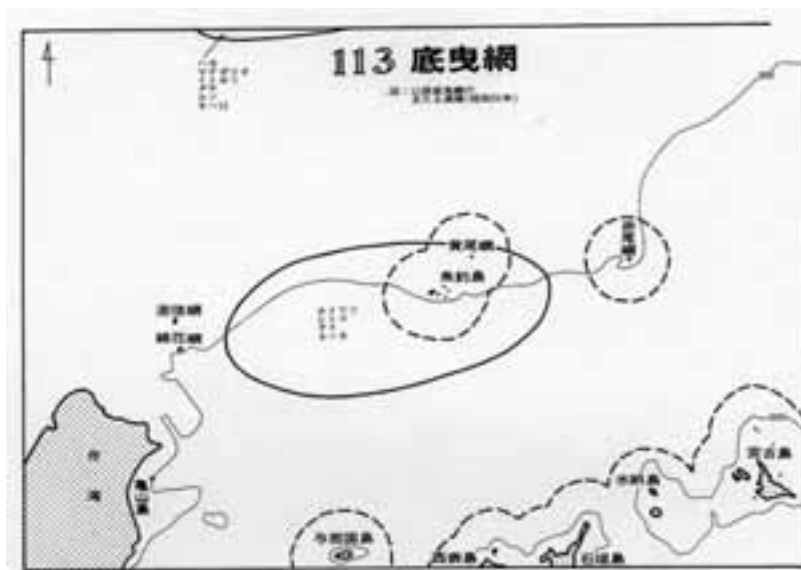
⑥ケンサキイカ

(「東シナ海資源評価 西海区水産研究所報告」より)

日本近海漁場図



全国漁業協同組合連合会は国内漁場を 113 海域に区分し、尖閣諸島海域漁場は 113 として、漁法、漁期、漁獲対象魚、操業海域、出漁地域等を記している。

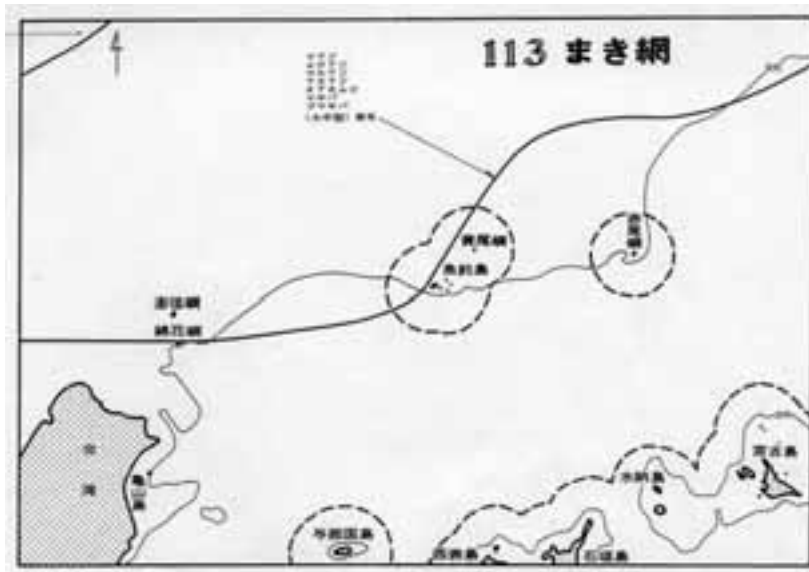


(「日本近海漁場図 1977」より)

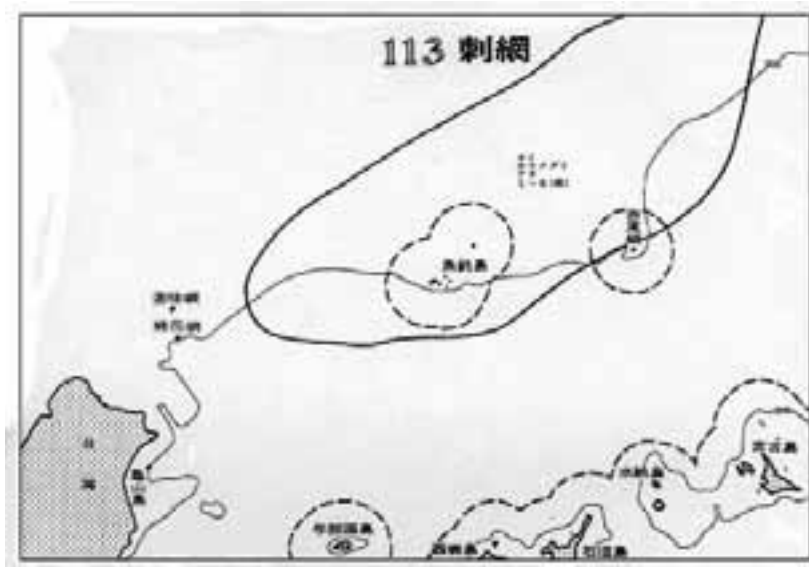
113 底曳き網 4～6月 カイワリ、レンコ、タイ 久場島(黄尾嶼)・魚釣島西方海域。

9～11月 ハモ、マナガツオ、イトヨリ、グチ、エソ

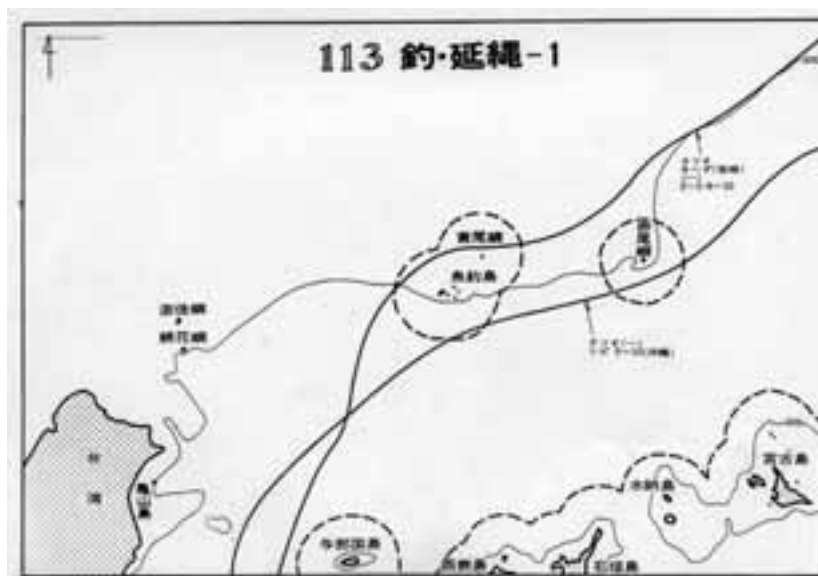
魚釣島・大正島(赤尾嶼)の北方大陸棚



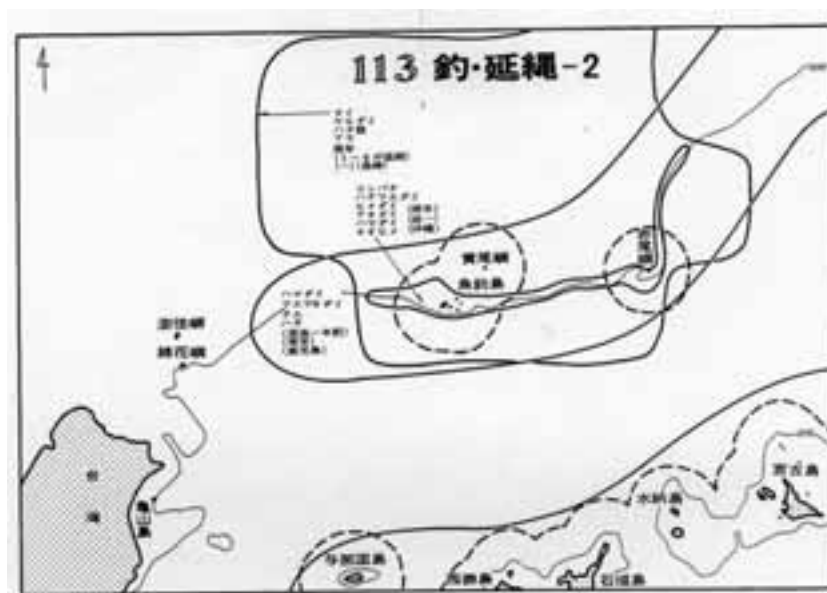
113 まき網 大・中型まき網：周年 アジ、ムロアジ、マルアジ、アカアジ、オアカムロ、マサバ、ゴマサバ 魚釣島・大正島大陸棚縁辺



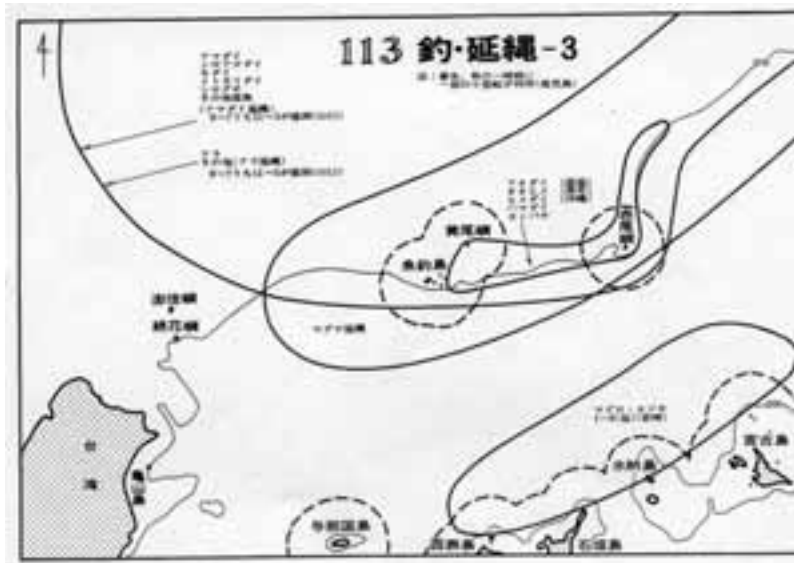
113 刺網 1～6月 タイ、オウメダイ、タラ 魚釣島・大正島大陸棚縁辺



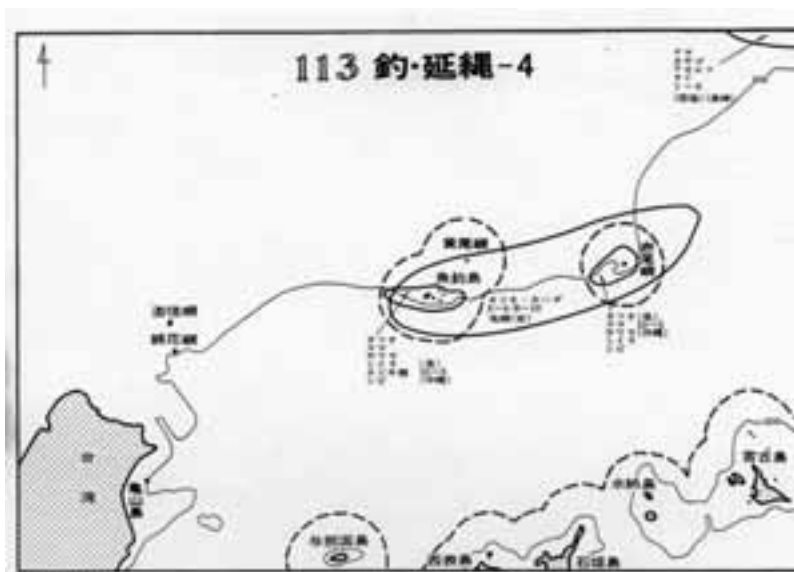
113 釣・延縄—1 一本釣：5～10月 カツオ、シビ 魚釣島・大正島大陸棚縁辺部。
2～3、8～10月 カツオ、キハダ 魚釣島・大正島大陸棚縁辺部



113 釣・延縄—2 一本釣：周年（1～6月盛期）タイ、マルダイ、ハタ類、アラ
魚釣島・大正島大陸棚縁辺。
底一本釣：周年 カンパチ、ハナフエダイ、ヒメダイ
魚釣島・久場島・大正島周辺

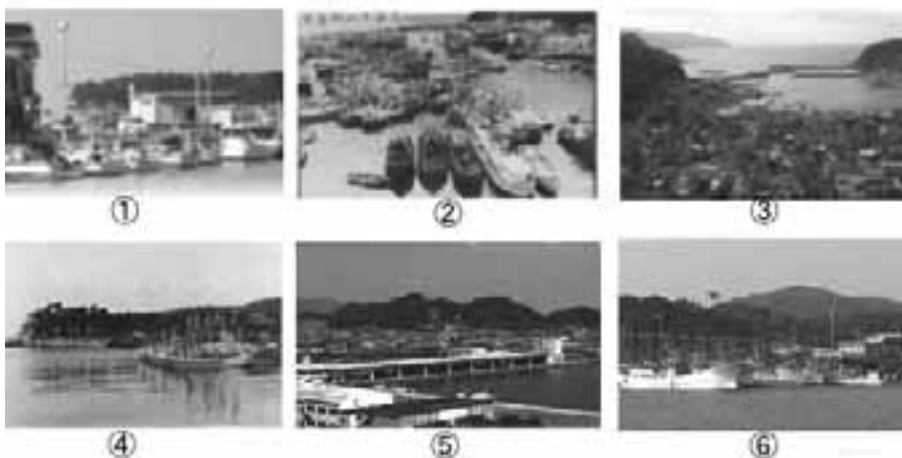


113 釣・延縄—3 アマダイ延縄：9～7月 アマダイ、シロアマダイ、キダイ、イトヨリダイ 魚釣島西方大陸棚。
 底延縄：1～6月 アラ、カサゴ、アカムツ、タイ 大正島東方大陸棚。
 周年：アオダイ、オオヒメ、ヒメダイ、ハマダイ、
 魚釣島・久場島・大正島周辺。



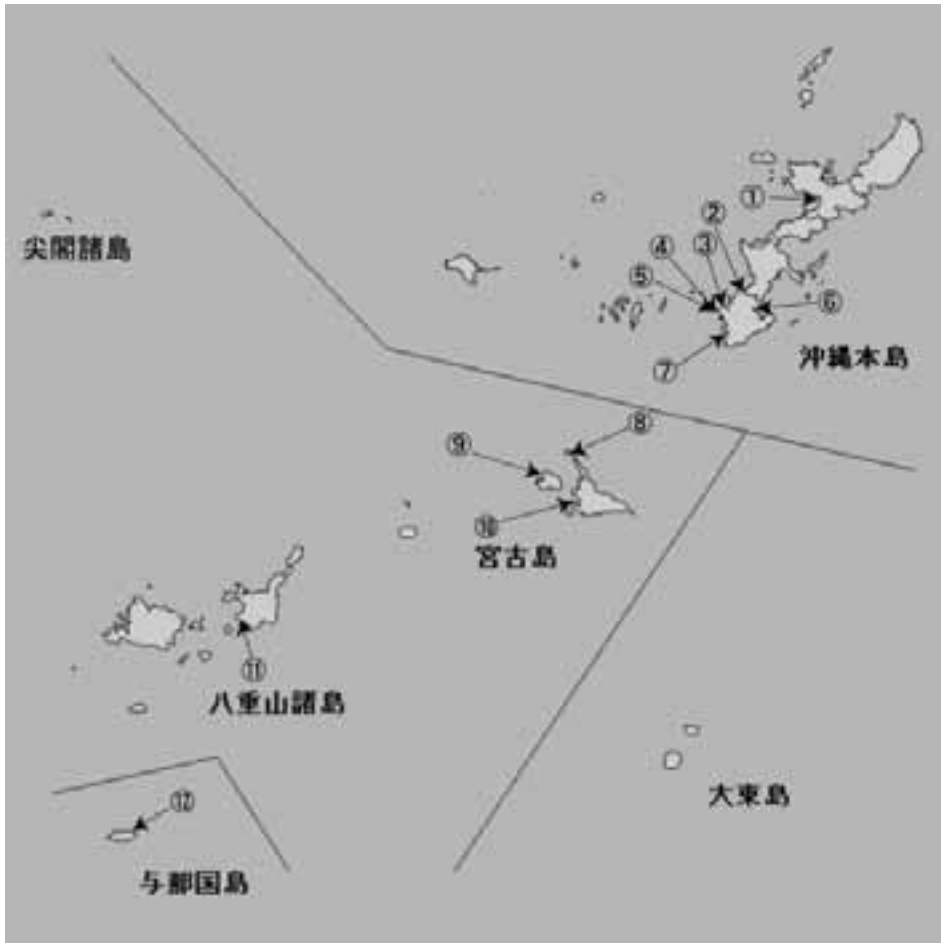
113 釣・延縄—4 曳縄釣：10～5月 カツオ、スマ、シイラ、サワラ、カジキ類、シビ 魚釣島・久場島周辺。
 曳縄：2～4月、8～10月 カツオ、キハダ 魚釣・久場・大正島周辺。

西日本各地から出漁



- ①山口県・玉江浦 ②長崎県五島・奈良尾 ③熊本県・天草
- ④大分県・白杵 ⑤宮崎県・油津 ⑥鹿児島県・指宿

沖縄県からの出漁漁協



- | | | |
|---------|-----------|-----------|
| ①名護漁協 | ②浦添・宜野湾漁協 | ③覇市沿岸漁協 |
| ④那覇地区漁協 | ⑤沖縄近海鮪漁協 | ⑥与那原・西原漁協 |
| ⑦糸満漁協 | ⑧池間漁協 | ⑨伊良部漁協 |
| ⑩宮古島漁協 | ⑪八重山漁協 | ⑫与那国漁協 |



③那覇市沿岸漁協



④那覇地区漁協



⑦糸満漁協



⑧池間漁協



⑨伊良部漁協



⑩宮古島漁協



⑪八重山漁協



⑫与那国漁協

東シナ海の黒潮回廊に位置する尖閣諸島海域は、国内有数の好漁場です。

明治期から開発利用された沖縄の伝統的漁場です。

島の周囲では、カツオが獲れるので、島の製造工場でカツオ節製造し、海域は多くの漁船で賑わっていました。

カツオ船やマグロ船、曳き縄、カジキ突ん棒、深海一本釣船、等々が行き来し、また島の傍らでは電灯潜りも見られ、様々な漁業が営まれていました。

今日ではカジキ突ん棒やダツ・トビウオ追込み（アギヤー）など消滅した漁業・漁法も少なくありません。

尖閣諸島で営まれた主な漁業（沖縄県）

<u>カツオ漁・カツオ節製造</u> 、 <u>マグロ延縄</u>
カジキ突ん棒、カジキ曳縄
ダツ・トビウオ追込み、グルクン追込み
<u>深海一本釣</u> 、 <u>底立延縄</u> 、 <u>底延縄</u>
サバ跳釣・棒受け、 <u>曳き縄</u>
電灯潜り、サンゴ網漁

本章では、下線の5つの漁業・漁法について紹介します。

尖閣諸島海域における各地区の漁業概表（沖縄県）

	沖縄本島地区	宮古島地区	八重山地区
終戦～1950 頃	ダツ追込：糸満	カジキ突棒：伊 ※台湾より出漁含	ダツ追込：石(糸) カジキ突棒：与/鳩 マグロ延縄：石垣
1950 年代	ダツ追込：糸満 カジキ突棒：与那原 深海一本釣：那覇地区 サバ跳釣：琉水 サバ棒受：琉水	ダツ追込：池(糸) カジキ突棒：伊 鯷竿釣：池/伊/宮 カツオ節：池/伊/宮 曳縄：池/伊/宮 深海一本釣：池/伊/宮 サンゴ：池	ダツ追込：石(糸) カジキ突棒：石/与 鯷竿釣：石垣/鳩間 カツオ節：石垣
1960 年代	ダツ追込：糸満 カジキ突棒：与那原 深海一本釣：那覇地区 サンゴ：那覇地区	曳縄：池/伊/狩 深海一本釣：池/伊/宮 サンゴ：池/伊/宮	鯷竿釣：石垣 曳縄：石垣 深海一本釣：石垣 底延縄：石垣 潜り：石垣 サンゴ：与那国
1970 年代～ 復帰以降	ダツ追込：糸満 深海一本釣：那覇地区 底立延縄：糸満/那地 電灯潜り：那沿/浦宜 サンゴ：那覇地区	鯷竿釣：伊良部 曳縄：池/伊/宮 深海一本釣：池/宮 サンゴ：池/伊/宮	曳縄：石垣 深海一本釣：石/与 潜り：石垣 電灯潜り：石垣 サンゴ：与那国

※表中の漁協等の略式名は以下の通りである。

沖縄本島地区：那覇地区漁協＝那地、那覇市沿岸漁協＝那沿、琉球水産(株)＝琉水
糸満漁協＝糸、与那原・西原漁協＝与、浦添・宜野湾漁協＝浦宜。

宮古島・八重山地区：池間漁協＝池 伊良部漁協＝伊、宮古島漁協＝宮、狩俣漁協＝狩
八重山漁協＝石垣、石、鳩間漁協＝鳩、与那国漁協＝与。

2、カツオ漁及びカツオ節製造

2、カツオ漁及びカツオ節製造

戦前期：尖閣諸島におけるカツオ漁及びカツオ節製造（明治期）



魚釣島古賀村の鰹釜納屋（カツオ工場）前で、勢揃いした写真。向かって右の面々はカツオ漁師たち。（明治41年）

鰹釜納屋を後方から撮った写真
奥方に佇むは尖閣諸島開拓者古賀辰四郎氏。
（同上）

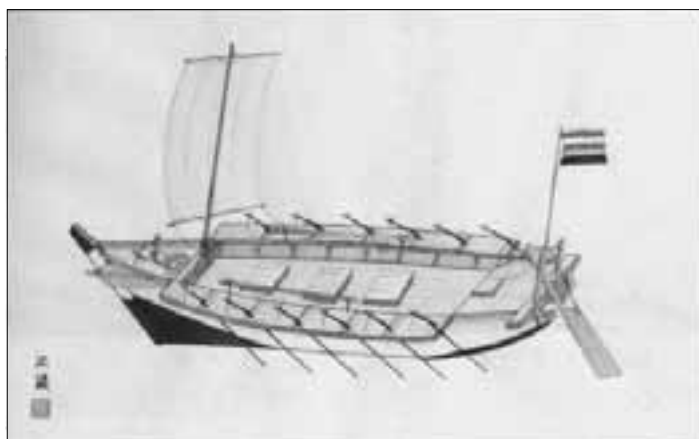


開拓事務所で、一同勢揃い
中央に客人と古賀辰四郎が見える。
後列の婦人たちはカツオ削り婦たちか。
（同上）



掘割(船着場)
カツオ船2隻
人力櫓漕ぎ
帆船である。
海岸に転がって
いる丸太は
船揚用コロ。
(明治41年)

明治期には
発動機船出る迄
櫓で漕いで
カツオ追っていた。
絵は
6丁櫓のカツオ船。
(「太田正義画」)

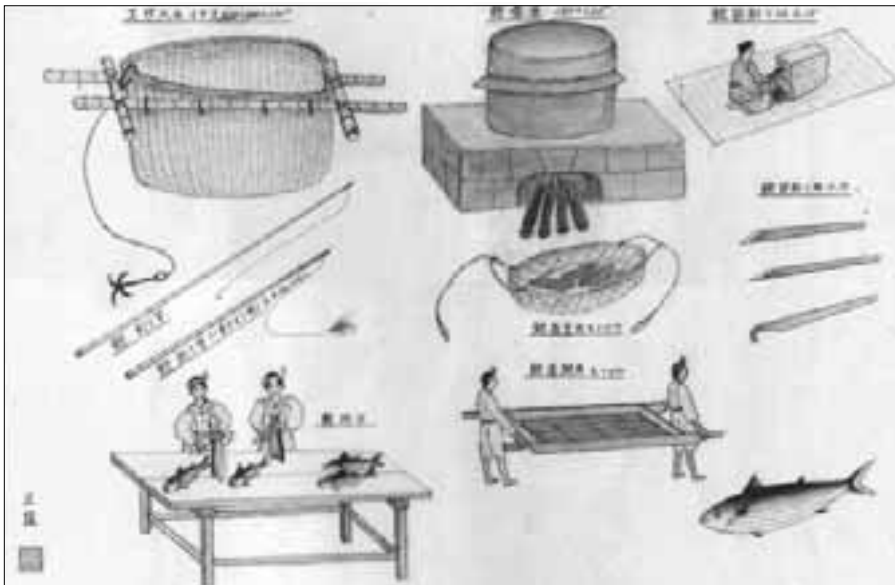


南小島の船揚げ
光景
鳥剥製工場拠点
の同島に船揚場
もあった。
手前に5丁櫓船
が陸揚げされて
いる。
奥のサバニ2艘
カツオのエサ採
り用か。
(明治41年)



魚釣島古賀村のカツオ製造光景、鰹釜納屋の横広場いっぱいにかつオ節が天日干しされている。(明治41年)

明治期製造のカツオ節を見つけました。
今の節と姿形は変わらず、味は？
(「ピーイボディー博物館・
モース博士コレクション」より)



カツオ節工場で使われた製造器具。カツオ煮炊き釜は、羽釜型から戦後は四角箱型に替っていることが分かる。(「太田正義画」)

戦後期：尖閣諸島におけるカツオ漁

冬期には、宮古・八重山各地からカツオ船が出漁



1960～1970年代に活躍した八重山漁協所属カツオ船金剛丸(20t)と玉城亀一船長。(玉城亀一提供)



1960年代に活躍した宮古島池間漁協所属のカツオ船宝盛丸(30t)と長嶺宗治船長。(長嶺巖提供)



1960～70年代は、カツオ漁の全盛期、海岸にはカツオ工場が立ち並んでいる。池間漁協所属のカツオ船泰光丸(30t)と仲間淳船長。(仲間淳提供)



尖閣諸島産カツオは、
宮古・八重山各所の製
造工場を賑わした。
写真は石垣大川の護
岸通り、煙突が立ち並
び、カツオ節製造は盛
んだった。
(「八重山写真帖」より)

八重山波照間島の
カツオ節製造工場。
(「同上」)



宮古島池間の海岸沿いのカツオ節製造工場。宝山丸工場(下段煙突の工場)は
魚釣島でもカツオ節を製造した。
(「沖縄池間島民俗誌」より)

カツオ節製造工程



釣手は、船に引き寄せたカツオを、釣り針に疑似餌(サビキ)を付けてポンポン釣り上げる。
甲板は、またたくまにカツオで一ぱい。僅か、10数分の勝負である。
写真は池間漁船の尖閣諸島でのカツオ釣り光景。
(「沖縄池間島民俗誌」より)

水揚げされたカツオを浜で頭とハラワタ(内臓)を切り落とし、製造場へ運ぶ。(波照間島)
(「八重山写真帖」より)



製造場での身おろし。
カツオの大きさ(大判、中判、小判)によって適当な大きさに見おろしされ、カツオは煮籠に並べて、釜で煮込みされる。
(伊良部島)
(「伊良部町漁業史」より)



炊き上げたカツオは温かいうちにバラ抜き(骨抜き)する。傷ついた所はシルクで穴埋めし、写真で示す焙乾作業(直接火を当てて乾燥)に入る。これは3日間休みなく火を燃やして行われる。写真は慶良間座間味の焙乾作業(バラ乾燥)で、尖閣とは無関係だが参考に掲載した。(「座間味村誌」より)

焙乾を終えたカツオは蒸籠に乗せ、外に出し天日乾燥させる。日干しが終わってカツオは削りにかけて節に仕上げる。(鳩間島) (「八重山写真帖」より)



あとはカビ付け、日干しを繰り返して、カツオ節に仕上げる。立派にできた節同士をぶつけると「キンキン」と金属音を発し、割ると濃い赤色の断面が現れるという写真は、部屋いっぱいに広げられたカツオ節の中で遊ぶ子供。(石垣新川) (同上)

:

尖閣諸島の古賀村跡におけるカツオ節製造 宮古・八重山漁民によるカツオ節（ナマリ節）製造（1950年代）



1950年代は氷が少ない時代であり、カツオは鮮度が命である。魚釣島・南小島の古賀村跡に仮工場を設けて、島周辺で獲れたカツオ節（ナマリ節）製造した宮古・八重山漁業関係者の面々。



1950年と58年には、宮古・八重山漁業関係者が尖閣諸島の古賀村跡に、仮工場を設け、カツオ節製造を行った。写真は南小島の同石積み、対岸北小島、遠くに魚釣島が見える。
(多和田真淳 1952)

尖閣諸島で、カツオ節（ナマリ節）製造した製造工場

	魚 釣 島	南 小 島
1950年	石垣島・発田鱈工場（工場主：発田重春） 池間島・宝山丸鱈工場（同玉寄正雄）	伊良部島・かもめ丸鱈工場（同漢那吉郎） 伊良部島・雄徳丸鱈工場（同漢那計徳）
1958年	な し	伊良部島・幸洋丸鱈工場（同前泊力） 伊良部島・隆祥丸鱈工場（同奥平幸三） 宮古島・進漁丸鱈工場（同洲鎌蒲四郎）



発田重春

1950年八重山石垣の発田カツオ工場は、魚釣島の旧古賀村工場跡を利用して、カツオ節製造を行った。

上：魚釣島古賀村跡の石積み。(田中一郎 1953) 下：石積み内の工場納屋。(多和田真淳 1952)



前泊力



奥平幸三

1950年宮古島池間のカツオ船宝山丸の船主、玉寄正雄は、魚釣島東端海岸に仮工場を設け、カツオ節製造を行った。

1958年宮古島伊良部の幸洋丸（船主前泊力）と隆祥丸（同奥平幸三）も節製造した。

上：南小島古賀村跡の石積み。(新納義馬 1971) 下：洞窟の水タンク。(仲間均 2002)



(図解)：南小島古賀村におけるカツオ節製造



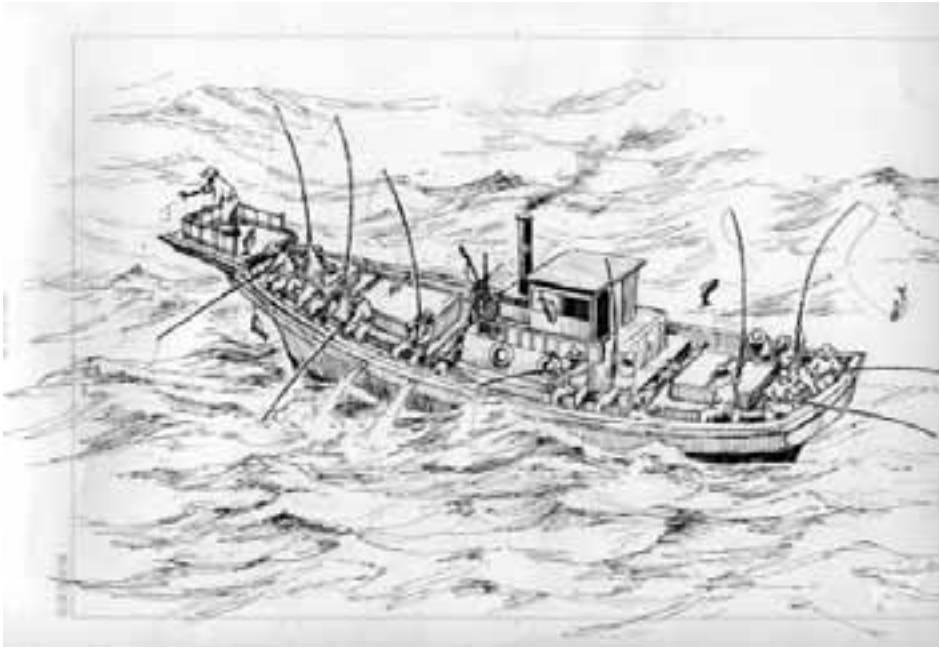
カツオ漁は活きた小魚をエサにしてカツオを船に引き寄せる。全員総出で網を入れて追い込んでエサの小魚を採る。
池間漁船のカツオ釣り光景。
(「沖縄池間島民俗誌」より)



主なエサの小魚 左：ウフミー(テンジクダイ類)約 10 cm。中：シーラー(キビナゴの 1 種)、体長約 8 cm。右：ムギヤー(ハタンボ類の小魚)体長約 15 cm 前後。



1950 年代の尖閣諸島ではエサの小魚は島の周りで採り、カツオを釣り上げている様子は島の仮工場から見えた。エサもカツオも島周辺で獲れた。
(新里堅進(イスト))



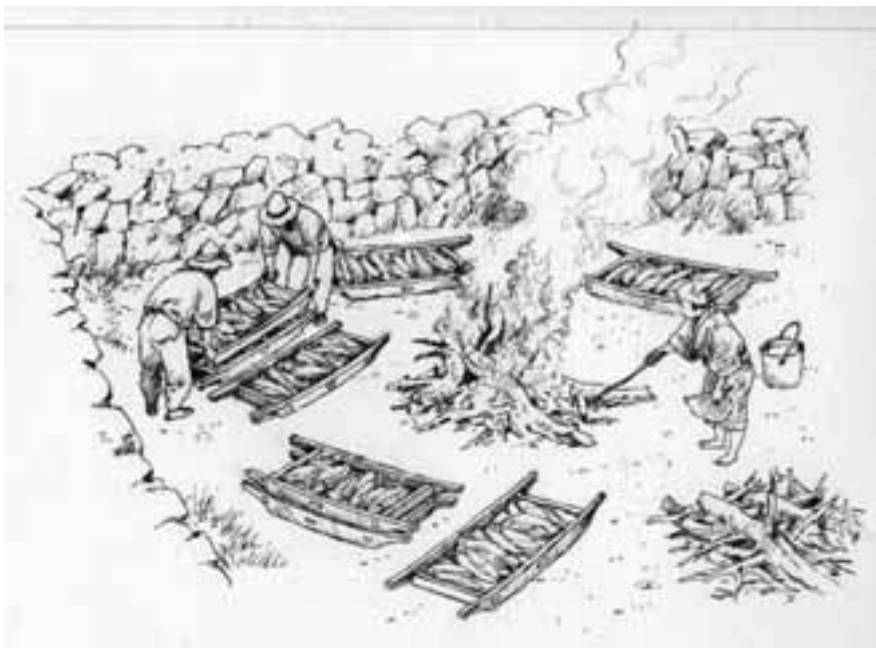
カツオをボンボン釣り上げている光景。またたくまに、甲板はカツオでいっぱいなる。島に水揚げされたカツオは、浜で頭と内臓を切り落とし、仮工場に運ばれる。(新里堅進(イラスト))



朝夕上空は飛翔する海鳥で一ぱいになり、鳥糞が容赦なく降ってくる。カツオの身割、身おろし解体作業は天幕の中で行う。(新里堅進(イラスト))



カツオの煮炊きは宮古島の工場から鍋や煮籠、蒸籠を持ち込み、石でカマドを拵え、石積みを利用したカツオ節づくり。
(新里堅進イスト)



焙乾はカツオをセイロに並べ数段積んで下から火をくべる。図は焙乾した節を取り出し乾燥作業の光景。全工程 10 日間ほどでナマリ節にしたという。(新里堅進イスト)

尖閣諸島のヤイトカツオ漁



カツオ船喜翁丸(9.9 t)
と漢那一浩船長。
親子3代に亘り
尖閣諸島で
ヤイトカツオ漁に
いそしむ。
(尖閣諸島文献資料
編纂会 2009)



カツオ船八幸丸(17.8t)と
久高明人船長。尖閣諸島
で荒波に遭い2度船を
失くした海の男である。
(同上)



カツオ船昇栄丸(17.8t)
と奥原栄一船長。
父親栄良氏は1951年
南小島の仮カツオ工場
長を勤め、親子2代尖
閣諸島と繋がりが深い。
(同上)



宮古島市伊良部漁港、
日本全国、尖閣諸島で
ヤイトカツオ漁専門は
伊良部島だけである。
(尖閣諸島文献資料
編纂会 2009)

カツオ釣りは
生きた小魚を
エサに使う。
夜が明けると
エサ採りは
作業開始。
(漢那竜也 2012)



宮古島周辺が
エサとなる小魚の漁場。
網を仕掛けて、
小魚を追い込む。
(同上)



網に追い込んだら、
全員で引き揚げる。
網はずっしりと重い。
(漢那竜也 2012)



小魚は元気なほど
いいエサだ。

網から素早く
船形状の生け簀に移す。
(上下：同上)



喜翁丸、
エサもいっぱい
積み込んで、用意万端
さあ、ヤイト(シマガツオ)
漁に出発だ。
(漢那竜也 2012)

一路、
尖閣諸島を目指す。
最初の目的地、
大正島沖合には、
数隻の僚船が操業。
(同上)



ヤイトは瀬の魚。
島の周りが漁場、
2,3キロまで
島に近づく。
(同上)



曳き縄船が
操業の最中、
池間の鳴丸？
(漢那竜也 2012)

早速、
ポイント決めて、
操業開始。
エサ撒きが先導役、
小魚投げて、
魚誘う。
(同上)



ボンボンと
面白いように食い付く
勢いよく竿引くと、
魚は空中高く舞い上がり、
針は外れて
魚はデッキに落ちる。
(同上)



魚との戦いは
僅か数10分。
戦い終えて、
散乱したヤイト
拾い集める。
(漢那竜也 2012)

結構な収穫。
ヤイト
脂がのって、
美味しそうだ。
(同上)



デッキを
洗い流しながら、
魚槽に入れて、
水氷で保管する。
(同上)



次の目的地
久場島に、
針路を向ける。
(漢那竜也 2012)

前方に
なだらかな島影が、
見えてきた。
あれが久場島。
今日は
潮の流れは速い。
(同上)



波も高く、
ポイント探しに
手間取る。
しばらく休憩しようか。
(同上)



海の男たちは
休みの合間も
道具の繕いに
余念がない。
(漢那竜也 2012)

手が空けば、
四方やま話に興じる。
満面の笑顔は
屈託ない。
(同上)



尖閣の海は
天候が急変する
大しけになれば、
魚釣島の島陰に急ぎ
避難する。
(同上)



前方左に
南小島と
北小島、
右手に魚釣島を
遠望する。
(漢那竜也 2012)

尖塔と見紛うは
北小島（右端）
南北小島周辺も
いい漁場だ。
(同上)



南小島の
海岸近くで
僚船が操業。
(同上)



魚釣島の北側は
絶好のポイント。
すでに僚船が先着。
(漢那竜也 2012)

魚釣島で
作業中の
幸徳丸
(同上)



旧古賀村の
船着き場跡
近くを航行する
我らが喜翁丸。
(仲間均 2011)



魚釣島の北斜面海岸近くで、シマカツオ漁。晴天、波も穏やかだ、魚は食い付きもよく、ドンドン釣り上がる。
(漢那竜也,2012)



魚を釣り手に
誘い込むは、
エサ撒きの腕次第。
投げる分量、
タイミングも
決め手だ。
(漢那竜也 2012)

エサが底ついた
デッキは魚で
いっぱい。
そろそろ終わろうか。
(同上)



うず高く
積まれている
魚を見れば、
疲れは、一瞬で
吹き飛ぶ。
(同上)



全員総出で
魚をダンプルに入れる。
船体もずっしりと重い、
満船大漁だ。
(漢那竜也 2012)

道具の片づけ、
掃除も済ませる。
日も
暮れかけてきた。
(同上)



尖閣の島々は
夕もやに包まれる。
喜翁丸は
急ぎ帰路につく。
(同上)

人気抜群!! 尖閣産ヤイトカツオ



伊良部漁港に帰港の喜翁丸乗組員の面々。手にしているのは、尖閣諸島で大漁のヤイトカツオ。(宮古毎日新聞)



セリ市場に
水揚げされた
ヤイトカツオ。
尖閣産は
脂がのって
美味しく
人気抜群
またたくまに
売り切れる。
(宮古毎日新聞
2013.1.22)



3、深海一本釣

3、深海一本釣

戦前尖閣諸島へ、沖縄県那覇垣花から出漁

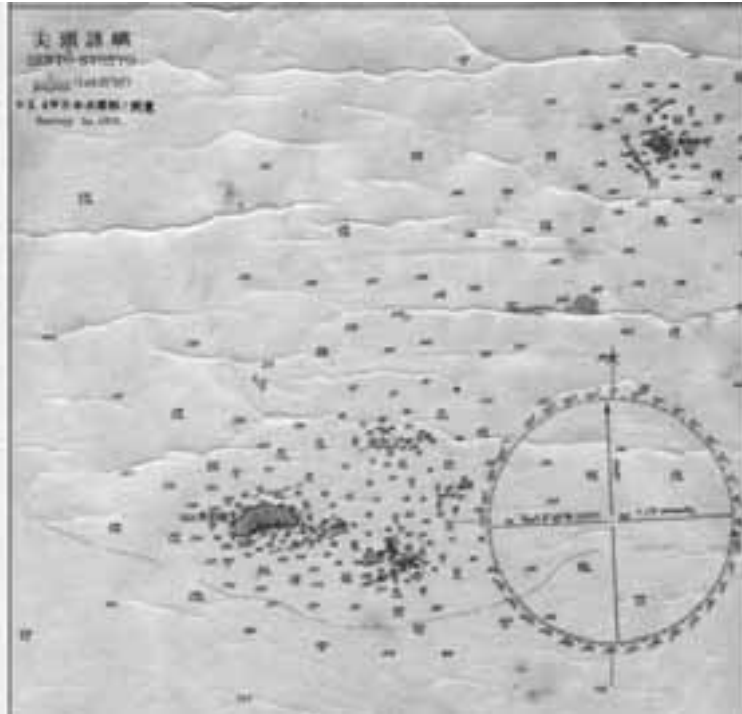


戦前の沖縄本島那覇市垣花の光景。那覇港をひかえた垣花は糸満と並ぶ漁業地で、深海一本釣船 40 隻余を擁し、尖閣諸島を主要な漁場としていた。
(那覇市歴史博物館提供)

1940 年那覇市水産会主催第一回甲板部講習会記念写真。此処に居並ぶ多くの水産人が尖閣諸島へ出漁していた。

(我那覇生康提供)





コンパスと海図を頼りに尖閣諸島へ出漁。縄に印を付けてオモリで沈め水深を測り、底魚を釣ったという。写真は当時使用した昭和7年(1932)発行の海図。「尖頭諸嶼・大正4年(1917)日本水路部ノ測量」とある。(安仁屋宗栄提供)

漁法1：石巻落とし



石巻落としは南西諸島特有の漁法で、海底に着くや急ぎ引っ張ると、石は外れて、魚はエサに食い付く仕掛け。オモリの石捨てて、魚を釣る漁法。船一ぱい石を積んで行った。

(尖閣諸島文献資料編纂会.2012)

漁法 2：単式ヤマギタ



深海一本釣は石巻落しから、写真のようなヤマギタに替わり、大きな進歩を遂げる。

下：針金を曲げて作った単式ヤマギタ、両端に釣針と幹繩、真ん中にオモリ石を固定して付けてある。左：単式ヤマギタの使い方を示す。

(尖閣諸島文献資料
編纂会,2012)



漁法 3：連結式ヤマギタ

尖閣諸島では、連結式ヤマギタに変わり、漁獲高は大幅に伸びる。下：針金を曲げて作った連結式ヤマギタ。右：連結式ヤマギタの使い方を示している。熟練した漁師は 5~8本連結して使用する。(同上)



戦争で漁民集落 壊滅、集団移転し、ゼロからスタート



1944年10月10日、米軍の空襲を受け、垣花の家並み漁船諸とも壊滅した。写真は炎上している那覇港垣花一带。

(那覇市歴史博物館提供)

終戦後は、米軍に土地は接収され、集団移転を余儀なくした。写真は米軍事施設建設のため敷きならされた那覇軍港一带(1945年)。

(那覇市歴史博物館提供)



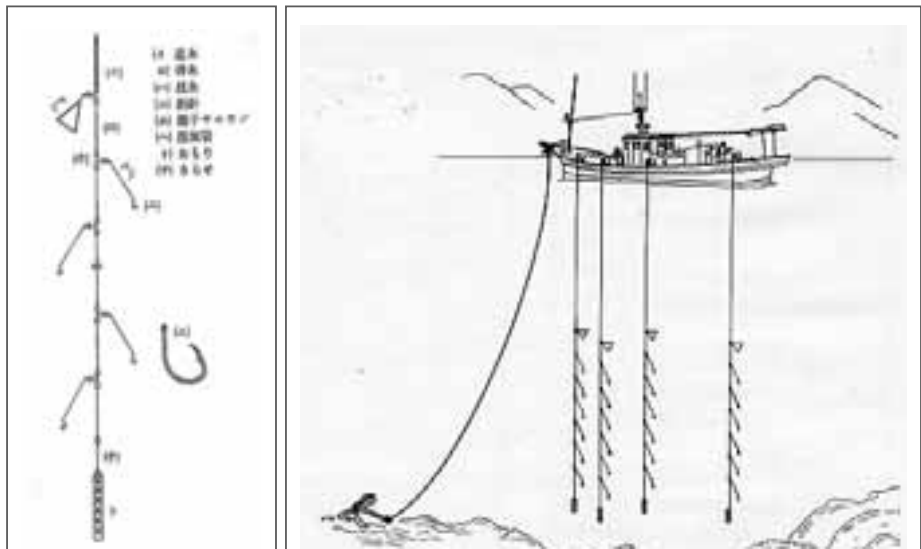
那覇市安謝などに集団移転し、新天地でゼロから漁業の復興再建に取り組む。造船場の光景。

(「琉球大学所蔵写真帳」より)

尖閣諸島へ出漁再開



垣花漁民は、いち早く那覇地区漁協を結成し、伝統的漁場である尖閣諸島へ次々と出漁を再開する。写真は1960年初頭の泊港に停泊している那覇地区漁協の深海一本釣漁船。(那覇市歴史博物館提供)



1950年代半ばには、深海一本釣は二股サルカンとナイロン糸の出現により、ヤマギタ漁法から現在の形態(左上図)に替わり、大きな発展を遂げる。
左上図：深海一本釣の操業光景。(「沖縄県の漁具、漁法」より)



深海一本釣は1本の縄は釣針5~10本を仕掛けて、魚を釣るので漁獲は飛躍的に増大した。左：縄揚げる度にヒメダイが4,5尾も。(与那嶺三郎.1961年頃)。
右：甲板にいっぱい積まれたヒメダイ。(豊見山恵盛.1963)



1960~70年代の那覇地区漁協所属の深海一本釣船は3,40隻余数え、尖閣諸島を主要な漁場にして盛業極める。写真は那覇泊港構内での同漁協海神祭の爬竜船競漕に見入る人々。
(那覇市歴史博物館提供)。



1950～60年代に活躍した那覇地区漁協所属の深海一本釣船「五真丸」(15 t)と國吉真一船長。
(那覇市歴史博物館 提供)



1960～1970年代に活躍した那覇地区漁協所属の深海一本釣船「瑞幸丸」(155 t)と渡嘉敷真厚船長。
(渡嘉敷真厚 1966)。



1960～1970年代に活躍した那覇地区漁協所属の深海一本釣船「有昌丸」(16 t)と我那覇生康船長。
(我那覇生康 1965)



深海一本釣は沖縄各地に広まった。1970～1980年代に活躍した八重山漁協所属の深海一本釣船「協徳丸」(15t)と比嘉幸信船長。
(比嘉幸信提供)



1970～1980年代に活躍した那覇地区漁協所属の深海一本釣船「安洲丸」(10t)と高江洲昇船長。(高江洲昇 1965)。



1980～2000年代に活躍した那覇地区漁協所属の深海一本釣船「兆福丸」(5t)と外間安健船長。
(外間安健 1985)

深海一本釣船の大漁旗



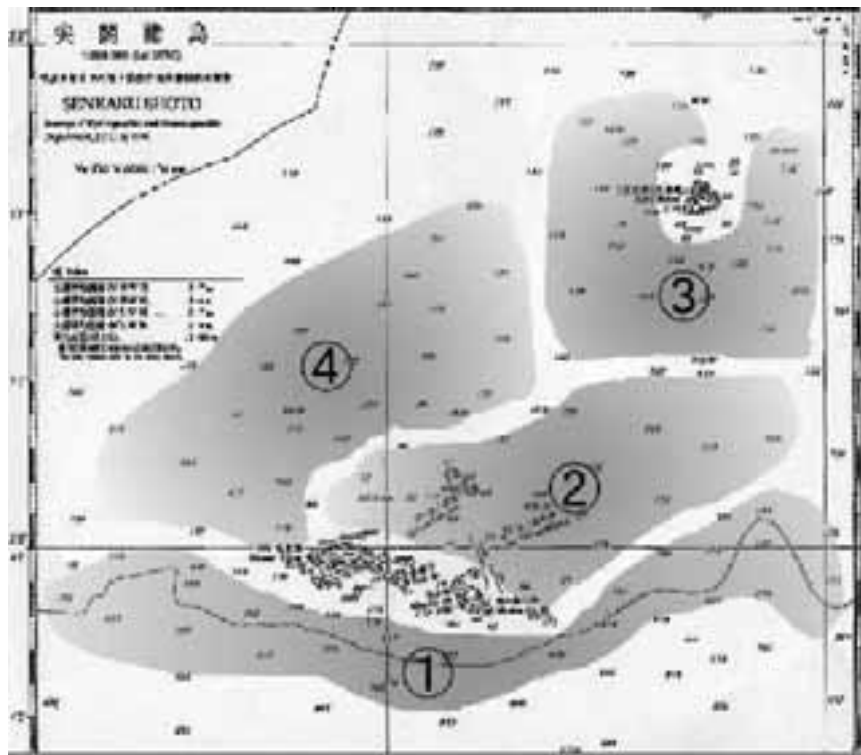
尖閣諸島で魚を満船すると、大漁旗をへんぽんと翻し、汽笛を大きく鳴らし意気揚々と帰港する。写真は那覇地区漁協の深海一本釣船の中央マストに高々と掲げられた大漁旗。



旧曆都市初めには航海安全と大量祈願を行う。大漁旗を揚げて勢揃いした那覇地区漁協所属の深海一本釣り団。
(那覇泊港にて)。(我那覇生康 1982)。



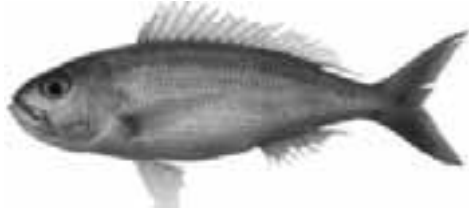





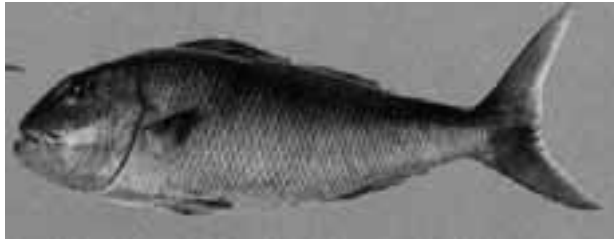
上：魚釣島(右)と南・北小島(左)。
右：久場島。尖閣諸島はどこでも
底魚の好漁場。(上原博輝 2012)。



深海一本釣の操業海域模式図 ①大陸棚百尋線付近、②・④魚釣島・南北小島付近
③久場島付近、これらが主要な漁場である。(渡嘉敷真厚 2013)

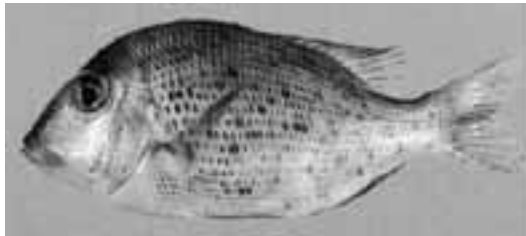
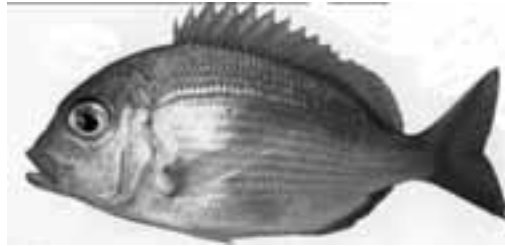
尖閣諸島で釣れる主な底魚

	<p>ハマダイ 高級魚 水深 180 ～400mに生息 大きさ 50～100 cm</p>
<p>アオダイ 水深 120～180mに生息 大きさ 25～50 cm</p>	
	<p>オオヒメ 水深 90～160mに生息 大きさ 40～60 cm</p>
<p>ヒメダイ 水深 120～180mに生息 大きさ 25～40 cm</p>	
	<p>ハナフエダイ 水深 200～400mで釣る 大きさ 25～40 cm</p>
<p>シマアオダイ 水深 100～200mに生息 大きさ 60 cm位</p>	



アオチビキ
比較的上層でも釣れる
大きさは 50～100 cm

キビレアカレンコ
水深 100～200 m の
砂地に生息
.. 大きさは 35 cm



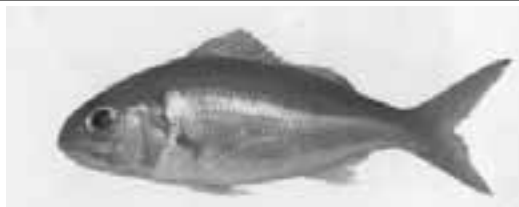
シロダイ
50～100m以深で釣る
大きさは 35～60 cm

カンナギ
100m以深に生息
大きさは 15～40 cm



**オオグチ
イシチビキ**
水深 80～150 m に生息
大きさは 25～40 cm

ハチジョウアカムツ
水深 180～400 m に生息。
大きさは 100 cm位



九州各地からも出漁



九州各地からの深海一本釣船が尖閣諸島へ出漁。写真は那覇泊港を基地に停泊している鹿児島、熊本県船籍の一本釣船。

(尖閣諸島文献資料編纂会 2013)

右舷には10台ほどの釣機が並ぶ。1人2台の釣機を使い、深さ100～200m海中に投縄して底魚を狙う。(同上)



GPS画面を指して「尖閣諸島は魚群が多く、釣りポイントが多い」と説明する鹿児島県船籍「みつ丸」の宮崎卓己船長。(同上)

鹿児島・熊本・大分船籍の深海一本釣船



第三宏栄丸 (19t)



高吉丸 (19t)



栄丸 (19t)



八坂丸 (19t)



高治丸 (19t)



芳栄丸 (19t)



第八幸丸 (19t)



第三めぐみ丸 (19t)



1970年代から活躍している熊本県樋島漁協所属の深海一本釣船「海栄丸」(19 t)と丸山文博船長。(尖閣諸島文献資料編纂会 2013)



1970年代から活躍している鹿児島県指宿漁協所属の深海一本釣船「高吉丸」(19 t)と高杉忍船長。
(同上)



1970年代から活躍している鹿児島県喜入町漁協所属の深海一本釣船「みつ丸」(19 t)と宮崎卓己船長。
(同上)

深海一本釣の操業光景

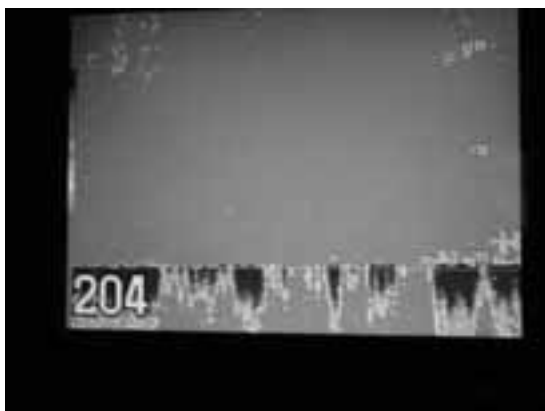


尖閣諸島へ操業
に向かう深海一
本釣船「みつ丸」
(19 t)の乗組員
の面々。
尖閣の荒波にも
まれたベテラン
揃いの漁師たち
である。
(宮崎卓己 2014)

尖閣諸島は、大正
島、魚釣島、南北小
島、久場島、どこも
好漁場である。
写真は北小島沖合
い漁場を航行中。
(同上)



魚釣島沖合いで、
魚群探知機で、
海底の魚群を探索中の
僚船「栄丸」(19 t)。
(同上)



目的の漁場に到着すると魚群探知機(左図)で魚群と深度を調べ、GPS(右図)でポイントの緯度経度を確認する。(宮崎卓己 2014)



風や潮の流れを見ながら、愈々縄入れ開始。甲板に緊張が走る。(同上)



深海一本釣は一本の縄には
釣針 5~8 本つける
手摺台に用意された
かけ餌の付いた釣針。
(宮崎卓己 2014)



カブ(撒き餌しかけ) (同上)



縄入れが始まると戦場のような忙しさ。
釣手は釣機 2 台を使って魚をドンドン釣り上げていく。(同上)



釣手は魚を釣り上げながら、合間を見ては、釣針にエサかけするなどして、次の縄入れ準備も怠らない。(宮崎卓己 2014)



一本の縄に釣針を5~8本を付ければ、多い時は魚が5,6匹は釣れる。



尖閣諸島は深海一本釣の好漁場である。底魚は季節を問わないが、潮流の関係で冬場の操業が多い。
写真は釣り上げたヒメダイの釣針を外しているところ。(宮崎卓巳.2014)



釣り上げた魚は釣針を外し、魚カゴに入れる。手前 2 つのクーラーボックスには釣手専用のかげ餌と撒き餌が入れている。(宮崎卓己 2014)

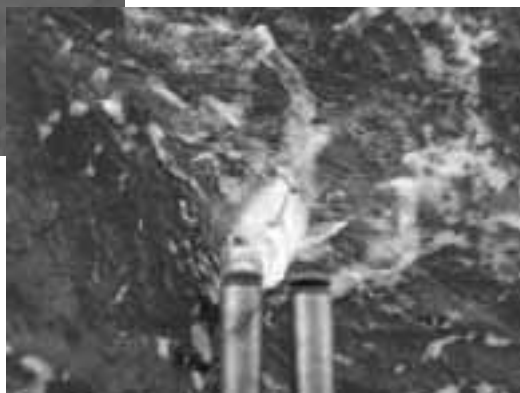
沖合で漁船が作業しているのを見つけ、一羽のアホウドリが近づいてきた。油断すれば釣った魚を横取りされてしまう。(同上)



他の鳥もかぎつけ7,8羽が船に集まってくる。魚を投げ与えると、我先にと奪い合う。尖閣諸島ならではの珍光景。(同上)



海中から姿を現した
ハマダイ、
腹が膨れて
仰向けになっている。
(宮崎卓己 2014)



釣針から外れて
逃げないように
慎重に釣り上げる。
(同上)



クーラーボックスはまたたくまに満杯。赤くて尻尾の長い魚はハマダイ、
少し茶色みがかって見えるのはヒメダイ。(同上)



釣り上げたのはシマアオダイ、底魚は深さによって異なる。
竹竿の左は釣針から外れて逃げた魚を掬うためのタモの竿。(宮崎卓己 2014)



こちらのクーラーボックスも満杯だ。シマアオダイやヒメダイ、大きなハタ類もある。海底から釣り上げると腹が膨れてひっくり返っている。(同上)



今日の収穫は
大きなハマダイ。
重さは約5kg、
大きさは80cmの大物。
(宮崎卓己 2014)

このハタ類は
魚釣島の4,5マイル沖合
釣り上げる
重さは6,7kg
大きさは
85~90cmほど
(同上)



軍配は
このハマダイに上がった
重さ7kg超、
大きさは90cm超
尖閣諸島は
まさに底魚の宝庫。
(同上)



上：クーラーボックス
の中の釣り上げた魚。



左：魚を取り出し、
箱詰め作業に
取りかかる。
(宮崎卓己.2014)



魚を
魚槽に入れて保管
愈々、帰港準備。
(同上)



帰港しても
休む暇なし
魚を水揚げし
早曉のセリ市場へ
出荷作業で大忙し。
(宮崎卓己 2014)

魚を仕分けし
計量して
セリの準備に
余念がない
沖縄県漁連泊港市場にて
(同上)



魚には
重さ記した札が貼られ
仲買人が
魚の適否を
判断できるよう
丁寧に並べ置かれる。
(同上)



沖縄県漁連那覇泊港卸売市場に並べられた尖閣諸島産の底魚。中央はシマアオダイ。
(宮崎卓己 2014)



卸売り市場の床いっぱいに並べ置かれた尖閣諸島産のハマダイ。
この壮観な光景は尖閣諸島が底魚の豊かな漁場であることを示している。(同上)

4、底立延縄

4、尖閣諸島における底立延縄漁



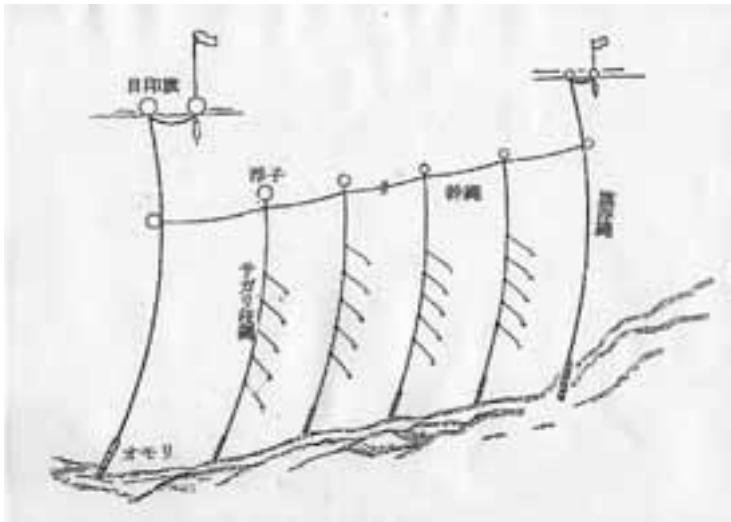
1970年代に活躍した
那覇地区漁協所属の
底立延縄船「第八幸
丸」(13t)と
与那嶺三郎船長。
(与那嶺三郎.1970)



1980年代から2010
に活躍した糸満漁
協所属の底立延縄
船「徳市丸」(9t)と
上原亀徳船長。
(尖閣諸島文献資料
編纂会.2009)



1980年代から活躍
している糸満漁協
所属の底立延縄船
「常丸」(7.7t)と
上原常太郎船長。
(同上)



底立延縄は
目印に旗を立て、
これに 80~150 本
の枝縄を吊るす、
長さ 2~4 km に及
ぶ。各枝縄には
5~10 本の釣針を
付けて、100~150
m 海底の底魚を釣
る延縄漁法。

枝縄は
浮球とオモリを付
けて海中に沈める。
カゴにあるのは
幹縄と浮球。
後方には釣針に
エサを付け投縄し
やすいように吊る
してある。
(上原博輝 2010)



漁場に向かう常丸
の甲板での投縄準
備光景。
円筒ポリバケツに
吊るした釣針のエ
サを点検をしてい
る。
(同上)



目指す魚釣島沖合いの漁場に到着。尖閣諸島海域は黒潮回廊にあるため、潮の流れが速く、波が高い。(上原博輝 2010)

漁群探知機とGPSで深さと位置を確かめてポイント地点を決める。決まると目印の旗を海中に投げ入れる。いよいよ投縄開始。(同上)



海上に立った浮旗。延縄の長さは2~4kmにもなるため、どこに縄入れたかは、この旗2本が頼り。後方に見えるのは沖の北岩。(同上)



縄入れ光景。
船をゆっくり
走らせながら
80本～150本の
枝縄を入れていく。
写真は
枝縄の浮球を
海中に投じている。
(上原博輝 2010)

1本の枝縄には
5～10本の釣針に
エサが付けてある。
これを次々投げ入
れる。
左手に持っている
のは鉄筋のオモリ。
(同上)



2人で呼吸を
合わせて、
手際よく
次々と
投縄していく。
(同上)



尖閣諸島は、大正島から魚釣島、南北小島、久場島沖合いといい、どこでも底立延縄の好漁場である。
写真は魚釣島沖合いでの操業光景。 (上原博輝 2012)



一通りポイントに縄入れたあと、少し休んで、縄の引き上げ開始。
これからが楽しみ。手応えが、ずっしりと重い。
(上原博輝 2010)

海中でバタバタ暴れ、波しぶきの中から水面に姿を現したのはオオヒメの大物！！
(同上)



食い付いた魚を次々と引き揚げ、手早く釣針を外す、一番楽しく緊張のひと時である。
(同上)



釣り上げたオオヒメ。水深 100m 付近にいる深海魚。美味しい魚である。
(上原博輝 2010)

尖閣諸島は潮の流れが速いため 1 日 4 回ほど投縄する。急いで次のポイントに向かう。
(同上)



久場島沖合いも底立延縄の好漁場である。幾つかのポイントが GPS には登録されている。
(同上)



写真は久場島沖
合いのポイント
に投縄した目印
の浮旗。
(上原博輝 2010)

潮の流れと
波の高さ、
風向きも
縄入れに頃
合いだ。
ここでも
相当食い付
くかも！
(同上)



予期した通りの大漁。縄を揚げると、魚も次々と釣れ上がってくる。(同上)

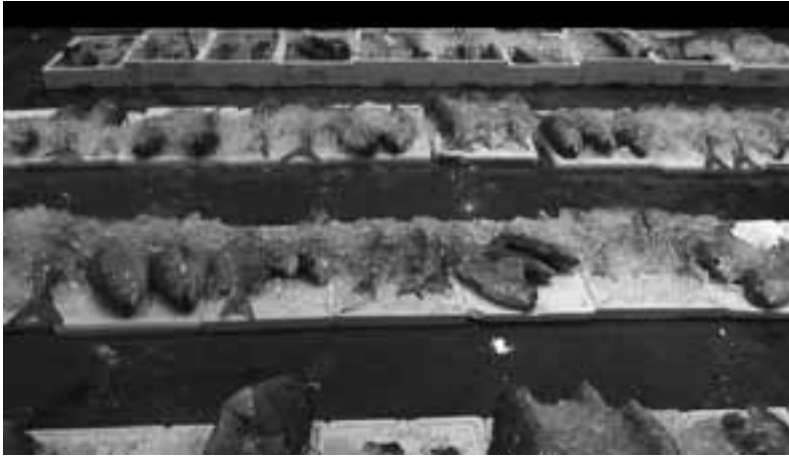


釣った魚は次々とダンブル(魚槽)に入れていく。オオヒメが多い。(上原博輝 2010)

港で水揚げし、卸売市場に出荷準備中の魚。右はサザナミダイ。左はハマダイ。(同上)



尖閣諸島での底立延縄は深海魚だけでなく浅瀬の魚も釣れる。写真はヤイトハタの大物。(同上)



魚を床いっばいに並べて、セリの開始を待つ。
(那覇市泊港セリ市場)
(上原博輝 2010)

セリ人の威勢のよい掛け声で、魚は次々とセリ落とされ
ていく。
(同上)



セリ落とされた魚(重さや数が記載)。これを見ると尖閣諸島の苦勞も吹き飛ぶ。
(同上)

5、曳き縄

5、尖閣諸島における曳き縄他



1960年代に活躍した宮古島伊良部漁協所属の曳き縄船「豊丸」(3.5 t)と長崎毅船長。(長崎毅1964)。



1980～1990年代に活躍した沖縄本島糸満漁協所属の深海一本釣・曳き縄船「国丸」(4.1 t)と松川国夫船長。
(松川国夫提供)



1980年代から活躍している宮古島池間漁協所属のカツオ船・深海一本釣船「第三吉進丸」(12.3 t)と伊良波満也船長。
(長嶺巖2011)



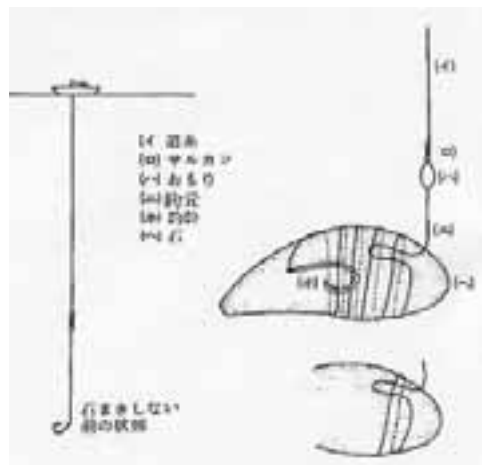
尖閣諸島では 1950 年代から曳き縄漁が営まれている。曳き縄は深海一本釣との兼用。深海一本釣にするか、曳き縄漁にするかは潮の具合は天候等で判断する。

写真は曳き縄漁に従事した船長・乗組員の面々。



曳き縄の図、尖閣諸島では小型船により、曳き縄は 2~4 本使用する。船をゆっくり走航しながら、ヒコーキ、擬餌素曳を用いて、表層魚(カツオ、シビ、マス等)を漁獲する。
 (「ウェブサイト」より)

池間の石巻落とし漁。
 拳大の石にエサを巻き付けて、海底に沈め、深海魚を食い付かせる昔ながらの漁法。
 (「沖縄県の漁具・漁法」より)



大正島における操業光景



大正島は宮古島池間から北方 74 マイルにあり、9 ノットで 8 時間の距離にある。
(長嶺巖.2011)



大正島は洋上に突き出した屏風のような岩山の島。
島の東側の光景、周りの海は好漁場である。(同上)



尖閣諸島は、どこでも曳き縄の好漁場。大正島周辺もカツオ、マグロ、マチ類、タイ類、ハタ類など高級魚が釣れる。漁期ともなれば各地から漁船が集まる。操業しているのは宮古島池間漁協所属の漁船。(長嶺巖 2011)。



大正島の周り、
参集した漁業船で
賑わっている。
狙う魚と、漁場の様子で
漁法を決める。
(漢那竜也 2012)

浮き魚なら
船走らして曳縄
深海の魚なら
潮の流れ見て、
釣機を使うか
石巻落とし
(長嶺巖.2011)



島の周囲を
走航しながら
曳縄漁している
僚船盛蓮丸
(漢那竜也 2012)



潮の流れ
見ながらポイント
探索中の
第五満漁丸。
(漢那竜也 2012)

波が静かな時
石巻落して
深海魚を狙う
池間漁民特有の
漁法である
(同上)



大物が
食い付いたか
ずっしり重い
池間漁師は
石巻落としの
ベテラン揃いだ
(同上)



島の周囲
走行しながら
曳き縄していた
第五江裕丸
シビマグロ、シーラ
大量釣り上げる
(漢那竜也 2012)

陽は西に傾くと
大きな島影が
覆い被さる
そろそろ帰り支度
道具片付け作業
始める
(同上)



エンジン全開して
家路に急ぐ
大正島は好漁場
今回も満船大漁だ
(同上)



深海一本釣で
釣り上げたオオヒメ
大正島から魚釣島まで
尖閣諸島海域は
一本釣、曳縄の
好漁場
(長嶺巖,2011)

写真はシビマグロ
曳き縄で釣り上げる
下方にあるのは
石巻落とし用オモリ石
(同上)



石巻落して釣った
オオヒメ。
水深 100m 前後にいる。
(同上)



上：チャイロマルハタ、下：アオチビキ。右端は石巻落とし用のオモリ石。(長嶺巖.2011)



上：シビマグロ、下左：カツオとシーラ、下右端：オキアジ。いずれも曳き縄。(同上)



チャイロマルハタの
大物。これが釣れると漁師
の顔に笑みがこぼれる。
尖閣諸島でよく釣れる
高級魚である。
(長嶺巖.2011)

深海魚の
オオグチイシチビキと
オオヒメ。
今回は一本釣機と
石巻落しで
釣り上げる。
(同上)



体長 90 cm、
重さ 5 kg の
オオグチイシチビキ
(同上)

6、マグロ延縄

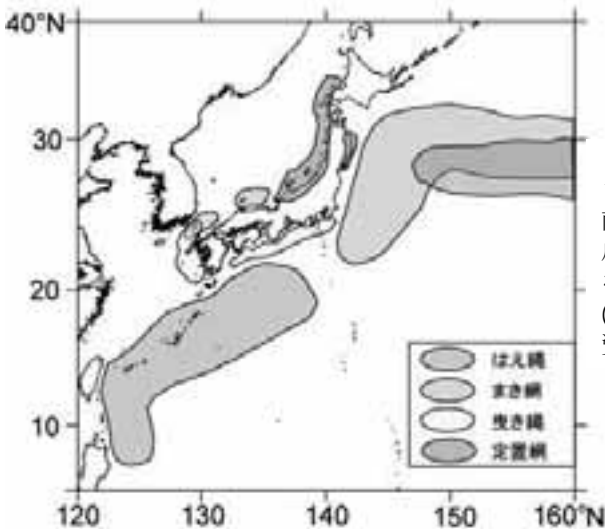
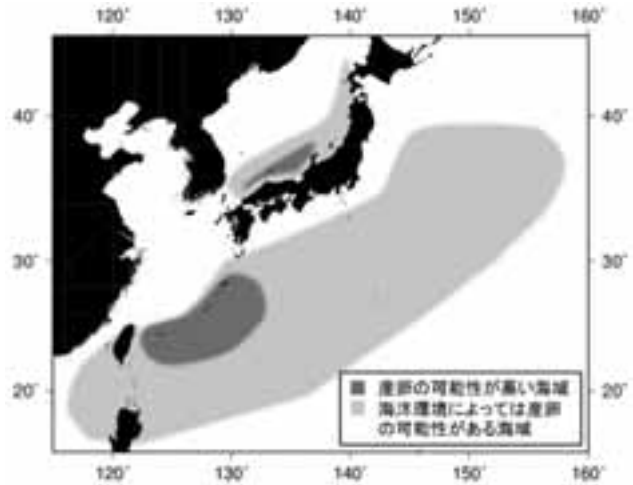
6、マグロ延縄漁

尖閣諸島と先島(宮古・八重山)諸島間は、マグロの好漁場

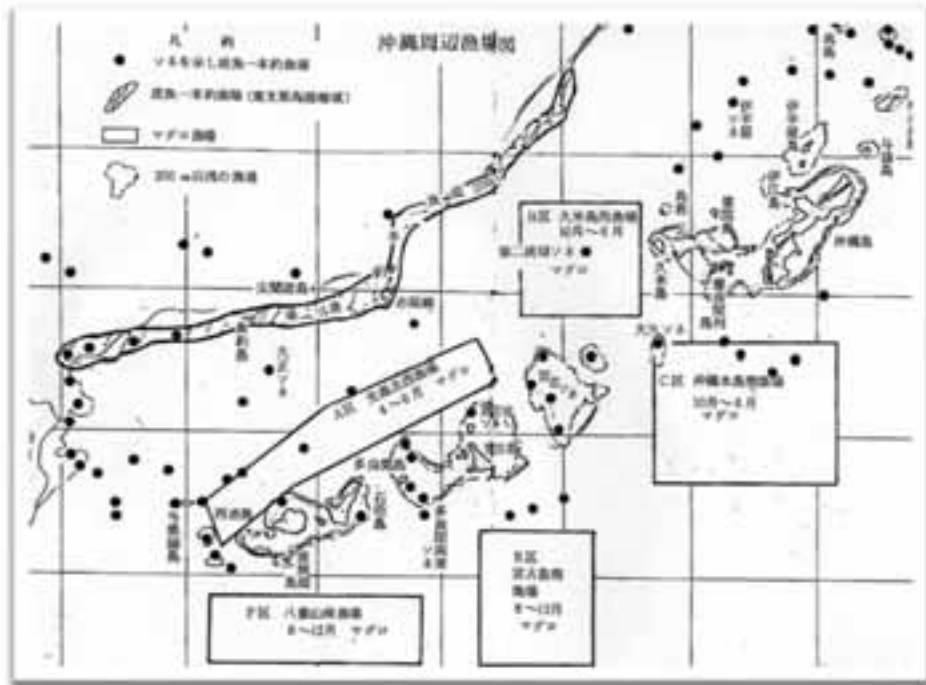


クロマグロの回遊図。
南西諸島を基点に産卵、
回遊していると推測される。
(「アジア太平洋資料センター
資料」より)

クロマグロの産卵場概念図。
尖閣諸島を含む先島海域が
産卵の可能性が高い。
(「水産総合研究センター
資料」より)



日本周辺における太平洋マグロの主な漁場分布図。
南西諸島を中心に
広い範囲にわたりはえ縄漁場
を示している。
(「水産総合研究センター
資料」より)



南西諸島のマグロ漁場図。尖閣・先島間漁場は日本有数の漁場である。黒潮回廊に位置しているためクロマグロの主要な回遊ルート・産卵場として重要な海域でもある。
(「沖縄県の漁具・漁法」より)



4月頃になるとクロマグロが北上し回遊してくる。尖閣・先島諸島間漁場はマグロ船で活気づく。クロマグロは無論、他のマグロも大漁する。
左：捕獲したクロマグロ。右上：キハダ。左下：ビンナガ。(仲田吉一.2007)



八重山漁協所属の
マグロ延縄船「第
八宏徳丸」(4.9 t)
と仲田吉一船長。
(仲田吉一.2001)



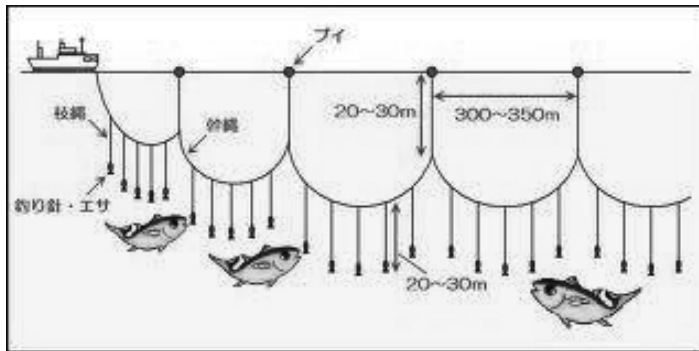
八重山漁協所属のマグ
ロ延縄船「萌丸」(11 t)
と高橋拓也船長。
(同上.2013)



八重山漁協所属
のマグロ延縄船
「恵信丸」(8 t)と
池庄司友範船長。
(同上.2013)



日本列島南端の八重山島は尖閣諸島に一番近い主要なマグロ漁町である。尖閣・先島諸島間漁場でマグロ延縄に精励する八重山漁協所属の船長・乗組員の面々。(仲田吉一.2013)



マグロ延縄の模式図
 (「日本かつお・まぐろ
 協同組合サイト」より)

4月頃から7月までが
 クロマグロの漁期。
 準備を整え出漁待つ
 八重山漁協所属の
 マグロ船団。
 (仲田吉一.2013)



マグロ延縄の操業光景



マグロ延縄の船尾から
投縄の様子。
左人後方に見えるが
投縄機。
船をゆっくり
航行しながら投縄。
(仲田吉一.2007)

1200 本余の釣針に
餌のイワシをかける。
狙うマグロの
種類に応じて
餌の大きさも
判断する。
(同上)



上方から見た
縄置台(左)と
餌置台(右)。
投縄機のブザーを
聞き分けながら、
二人でエサがけ、
枝縄、幹縄入れの
投縄作業を行う。
(同上)



延縄は約全長 50 k mにも及び、数 100m間隔で目印の浮(球)標、浮標灯(ダルマ灯)、ラジオブイ等を海中に投じる。写真は投縄船の航跡。遠くに浮標がかすかに見える。
(仲田吉一 2007)

左舷上方にある赤い大きな球が浮標。海中に投じているのはラジオブイ。
(同上)



大海原ではブイで延縄の位置を探索する。方向探知機でブイから発している電波を追跡する。
(同上)



いよいよ
縄揚げ作業開始。
縄の引っ張り具合を
手で確認しながら
ラインホルダーを
調整し、
縄を巻き上げていく。
(仲田吉一 2007)

大物が
掛かっているのか、
縄はずっしりと重い。
引く手に力がこもり、
心が躍る。
(同上)



引き寄せて見ると、
海中に
姿を現したのは
まぎれなくマグロ。
釣糸を
切り逃げようと
泳ぎ回る。
(同上)

クロマグロの捕獲



船に引き寄せて、
モリで脳天を突く。
動きが鈍くなった
隙を狙い。
エラもとを
鉤竿に掛ける。
(仲田吉一 2007)

鉤竿で海中から
引き寄せ、
2人掛りで
甲板に引き上げる。
(同上)



釣れたのは40~50kgほどのキハダ。暴れ防止マットに乗せても動き跳ねる。
脳天を針金で突き刺し留めをさす。(同上)



クロマグロの捕獲は勇壮である。釣糸を引き千切ろうと、四方八方に逃げ回る。
逃がしてたまるかと甲板も大忙し。(仲田吉一 2007)



慎重に船に引き寄せて、脳天をモリで突く。海面は真っ赤に染まる。
暫くするとぐったりする。(同上)



船橋の巻揚げウィンチと鉤竿を使い、数名掛かりで甲板に引き揚げる。(仲田吉一 2007)



250 k g 超の大きなクロマグロ。甲板で暴れると折角の肉質が台無し。
脳天を突き刺して、息の根止める。(同上)



肉質を良好に保つには血抜きがポイント。
写真のようにエラもとを切り開いてのエラ取り作業もその1つ。(仲田吉一 2007)



巨体だけにダンブル(魚槽)に入れるのも一苦勞。
水氷をかき分け、やっとかさ押し込んで入れる。(同上)

サメも、カジキも、延縄に食いつく



マグロ延縄にはサメ類も多く掛かる。写真は人食いザメの一種アオザメ。
(仲田吉一 2007)

カジキもサメと並び延縄に食いついてくる常連客。
(同上)



甲板に引き揚げられたアカマンボウ。
(同上)

ミズウオが釣れた。
(同上)





縄揚げは時には深夜に及ぶ。夜の海中をマグロは釣糸切ろうと逃げ回る。(仲田吉一 2007)

モリは見事に命中。
脳天に突き刺さり、
血しぶきが上がる。
(同上)





ブリッジのウィンチで吊り上げ、数名がかりで甲板に引き揚げる。ずっしりと重い。
(仲田吉一 2007)



実に見事なクロマグロ。300kgは優に超えるか。深夜に及ぶ疲れも一気に吹き飛ばす。(同上)

水揚げ、卸売り市場光景

石垣港での水揚げ光景。
ウインチに
2つ吊り揚げられている
のはキハダ。
(仲田吉一.2007)



上：今航海の大きな収獲
その1つのクロマグロ。
(同上)

右：ウインチに吊り下げら
れて、八重山漁協卸売市場
構内へ。(同上)





卸売市場構内に運び
込まれたメバチ。
(仲田吉一 2007)

汚れや血垢を
洗い流して、
セリへの下準備。
(同上)



大きいのは 130kg の
クロマグロ。
エラ痕が
ぼつかり開いている。
小さいのは 50 kg ほどの
キハダ。(同上)

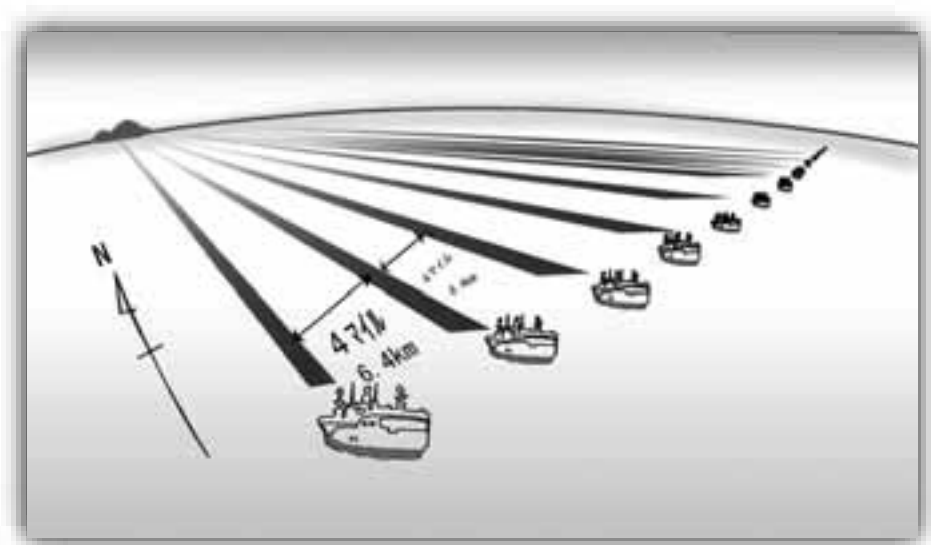


セリ落とされた
キハダ(中2つ)と
ビンナガ(両端)。
(仲田吉一 2007)

マグロの美味しさは
鮮度が命。
セリ落したマグロを
捌いている
魚市場の人達。
(同上)



クロマグロは
まさにマグロの王様。
味、色、
脂ののりがよく、
最高の美味しさは
人気抜群。
(同上)



マグロ延縄船は、先島北西漁場では、北緯 25 度、東経 124 度の地点から、全船 4 マイル等間隔で並び北北西方向に、尖閣諸島の方角に向けて一斉に投縄する。